［史料］

ドイツ中世『奇蹟録』の邦訳

12世紀ミュンスターの聖リウドゲルスの奇蹟について

山本　健*

Translation of a Record of German Medieval Miracles

—*Libellus Monasteriensis de miraculis S. Ludgeri*—

Takeshi YAMAMOTO

This paper translates a record of German medieval miracles into Japanese in order to examine the medieval mentality and piety of laypeople in northwestern Germany. The translation is an attempt to assist research on the medieval mind in the town and countryside. The *Libellus Monasteriensis de miraculis S. Ludgeri* was written in medieval Latin by an anonymous priest in the late twelfth century and consists of seventeen miracle stories. Two stories are related to the city of Münster during the Investiture Contest. Eleven are related to cures of illness (eyes, legs, etc). This record appears to be a kind of monastic propaganda for laypeople to encourage the spread of faith in God among them. On the other hand, the material provides a way to approach the ordinary lives of men and women in all kinds of situations and in all ranks of medieval society.

＊やまもと・たけし：敬愛大学国際学部助教授　ドイツ中世史
Associate Professor of German Medieval History, Faculty of International Studies, Keiai University.

史料の紹介

12世紀は、中世都市の興隆などに見られるように、西ヨーロッパ社会が急成長する、激変の時代であった。この変化は従来から封建社会の再編過程――例えば、農民の賦役労働に依存する領主直営地型荘園（ヴィリカチオン〔Villikkation〕）から地代型荘園（チンス＝レンテングルントヘルシャフト〔Zins-od. Rentengrundherrschaft〕）への移行、中世都市の興隆に伴う交易および手工業生産の増大、さらには市場取り引きおよび貨幣経済の成長など――と捉えられ、物質的・社会的な変化として考察の対象にされてきた[1]。しかし、この変化のもう一つの側面である精神的な分野での変化について十分に考察されてきたであろうか。ジャン＝クロード・シュミット[2]に従えば、当時の聖職者たちは、この時期の変化に伴って生じた社会階層の多様性――特に、市民階層など――を従来の3身分の序列的な図式では説明できないと認識し、初めて非聖職者に本格的な関心を持つに至った。そして教会は、非聖職者たちを教養がなく雑然とした集合体と見なすことはもはや出来なくなり、そのために非聖職者のそれぞれの集団の個性に関心を寄せ、その豊かな情報収集に努めたのである。このようなことから、まさに、12世紀は多くの聖職者により、非聖職者たちの伝説、信仰、儀式などの民俗学的知識が提供された時代でもあった。このような情報の分析は、これまで教会の統制の外側の世界を、とりわけ、非聖職者たちの心性（メンタリティー）を私たちに伝え、これまで不十分であった、12世紀の大きな社会的変動期の精神的な分野での不備を補えるものと思われる[3]。

もちろん、このような情報を伝える史料[4]は多種にわたるが、本稿で紹介しようとするものは、最近、筆者が関心を寄せているヴェストファーレン地方の中心都市、ミュンスター市[5]に係わる『奇蹟録』である。この『奇蹟録』は『聖リウドゲルスの奇蹟についてのミュンスター小冊子(Libellus Monasteriensis de miraculis S. Liudgeri)』と呼ばれ、12世紀後半に中世ラテン語で記録されたものである[6]。ここでの奇蹟の仲介者は聖人リウ

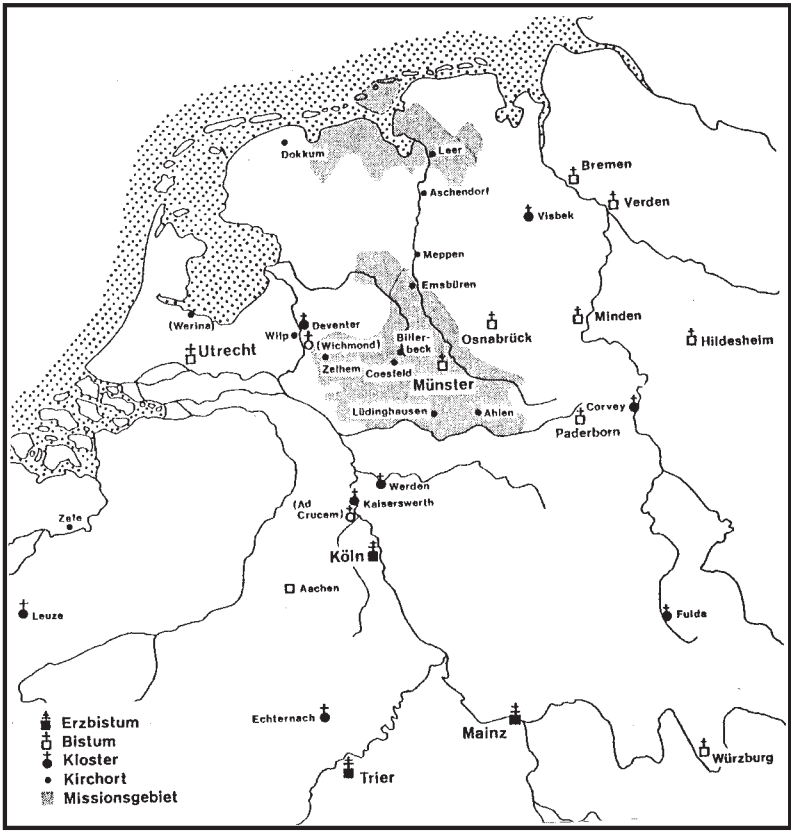
ドゲルス（Liudgerus）である。

（1）聖リウドゲルス（746/747–809年）について[7]

リウドゲルスは746/747年にフリースランドで生まれ[8]、6－7歳（754年頃）にして両親の許を離れてユートレヒトの聖マルチン修道院付属学校に入学し、ユートレヒトのグレゴリウス（Gregorius de Utrecht）のもとで教育を受けた。そして767–768年の1年間イギリスのヨーク司教座聖堂付属学校に留学し――〈767年にヨークの助祭（Diakon）になる〉――、アルクイヌス（Alkuinus: 735–804年）[9]から教えを受ける。そのアルクイヌスからの影響は大きく、ユートレヒトに帰国してすぐ、自分の恩師であるグレゴリウスや両親の反対を押し切って、再度、ヨーク司教座聖堂付属学校で3年半（769–772年夏まで）にわたる長期留学生として勉学に励むことになった。

リウドゲルスは帰国後[10]すぐにケルンで司祭（Priester）になり（777年）、フリースランドのドックム（Dokkum）の聖ボニファーティウス教会を中心に約7年間、伝道活動に励んだ（図1の黒の部分）。しかし772年に発生したザクセン人の反乱（ザクセン戦役：772–804年）に巻き込まれて、やむなく2年半（784–786年）にわたりローマとモンテ・カッシーノへ逃れた。その間にザクセンでは、785年にヴェストファーレンの豪族ヴィードゥキント（Widukind）が降伏し、洗礼を受けたのを機に、ザクセンの古い行政区であるガウ（Gau）はフランク王国のグラーフ（伯領）制度（Grafschaftverfassung）に吸収されるなど、いわゆるフランク化が一層進んでいた。教会政治の分野でも例外ではなく、従来の伝道指導者も更迭される（786/787年）など、787年に帰国した彼を待っていたのは厳しい現実であった。事実、ヴェストファーレン（西ザクセン）に教会（宗教的生活）指導者としてカール大帝が送りこんだ人物は、リウドゲルスではなく、アルクイヌスの親族であるエヒターナッハのベルンラードゥス（Beornradus de Echternach: 775年より同修道院長）であった。彼が777年以降、積極的にザクセンおよびフリースランドで伝道活動を行っていたことは証明されているが、彼の伝道地区

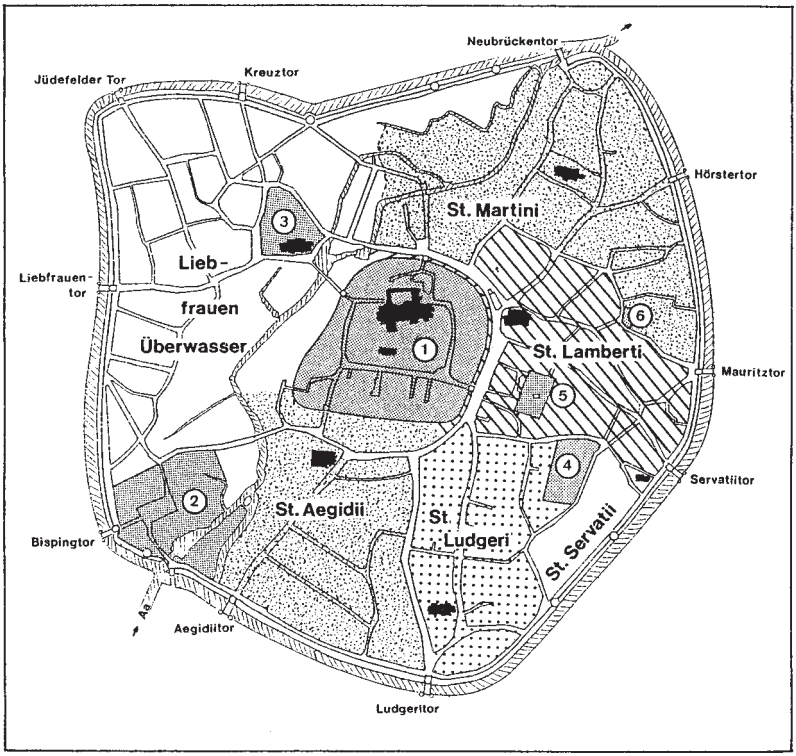
図1　リウドゲルスの伝導地域



（出所）E. Freise, *ibid.*, S.24.

で教会の再建がどの程度はかどっていたかは不明である。そんな中、792年にザクセン北部で教会の十分の一税をめぐって反乱が起こった[11]。このため、リウドゲルスのフリースランドでの伝道活動も無に帰し、伝道師たちも追放の憂き目をみた。しかし、カール大帝の顧問官たちは教会の十分の一税と反乱との直接的な関係を明確に認識し、そしてカール大帝はベルンラードゥスとの協議の上、ヴェストファーレン伝道管区の後継者として、現地出身者を、即ち、リウドゲルスを任命した（793年）。彼は自分の使命を、フランク王国の教会制度の中での活躍にではなく、むしろまだ心

図2　ミュンスター市の教区



（注）①*Domhof*, ②*Bispinghof*, ③*St. Marien-Überwasser*, ④*Domdechantsfreiheit*(*Niesing-*, *Pauli-freibeit*), ⑤*Immunitas Synagogae* (*vor 1350*), ⑥*Freibeit "In der Aske."*
（出所）Fr. -J. Jakobi, *ibid.*, S.530.

底キリスト教徒になりきっていないザクセン人の中に分け入って伝道活動を継続することに見いだしていたので、国王の申し出にかなりとまどったが、ケルン大司教の説得を受けて国王の申し出を受け入れた。そして彼は795年に、現地人からミミゲルンアフォルド（Mimigernaford）[12] と呼ばれていたアー河畔の丘（Aahugel）に溝と囲いをめぐらした防御施設（約8ヘクタール〔図2の①部分＝Domhof〕）を作り、そしてこの内に司祭たちを組織して修道院を作った。これがミュンスター（修道院の意）市の始まりで、彼は晩年（805年）になって初代の司教になった。彼は809年3月25日、ビラーベック（Billerbeck）で死亡した。そして彼の遺体は一時的にミュンス

ターの聖マリア教会に安置されたが、最終的にはヴェルデン・アン・デル・ルール（Werden an der Ruhr）の彼の私有修道院[13]に埋葬された。

（2）史料について

次に史料『聖リウドゲルスの奇蹟についてのミュンスターの小冊子』についてであるが、この文書はこれまで『Acta Sanctorum de Bollandisten』にも不完全な形で採用されており、まったく知られていなかったわけではなかった。本稿は『ヴェストファーレン文書集――追録（Westfälischen UB. Additamenta）』の中の史料を邦訳したものだが、この『文書集』は14世紀前半の手書き文書（Msc. VII. 462）を基礎にしている。なお、この手書き文書は 1833 年にミンデンの古物研究者たるモーヤー（Mooyer）を介してヴェルデン修道院の最後の院長ベーダ（Beda von Savel）の図書館から買い上げられ、そしてミュンスターの古文書館へ寄贈されたものである[14]。この小冊子の起草動機は、ミュンスター市の、聖リウドゲルス教会の木造の礼拝堂の建設にあった。そしてこの物語の中心的内容は、第 3 話の十字架 Crucifex〔キリストの磔像のついた十字架〕である。これはやがてミュンスター市に運ばれ、そして第 2 話での1121年のミュンスター都市火災[15]の際に、十字架が置かれていた穀物倉庫が奇蹟的に無傷のままで残ったことで、注目されることになった。小冊子はこの事実を第 1 － 3 話に、そして第 4 話以降は聖リウドゲルスの奇蹟譚を掲載している。

最後にこの小冊子の起草時期であるが、この著者は木造の礼拝堂だけを知っていたにすぎず、今日なお存在する石造建築物――〈司教ヘルマン 2 世（Hermann II.）在任期間中（1174–1203年）に建立〉――を知らないことから、また頻繁にルードビッヒ司教（1169–1173年）が言及されていることなどから、時期的にはルードビッヒ司教が在職していた 4 年間に限定される。またこの著者であるが、上記の礼拝堂の初代司祭の可能性が大きいが、この人物の氏名は不明である。

いずれにせよ、この小冊子からキリスト教を、また領主直営地型荘園の導入に伴う教会十分の一税を強制されたザクセン（ヴェストファーレンをも

含む）地方の民衆のメンタリティーを垣間見ることができるように思われる。

（注）

(1)　北西ドイツ、特にヴェストファーレン地方については、W. Rösener, Grundherrschaft und Bauerntum im hochmittelalterlichen Westfalen, in: *Westfälische Zeitschrift*, Bd. 139, 1989 S. 9–41. および伊藤栄『西洋中世都市とギルドの研究』、弘文堂、1968年、一般論としてはWilhelm Kohl（Hrsg.), *Westfälische Geschichte,* Düsseldorf, 1983, Bd. 1.などを参照。

(2)　ジャン=クロード・シュミット（松村剛訳）『中世の迷信』、白水社、1998年、133–141ページ。

(3)　渡邊昌美『中世の奇蹟と幻想』、岩波新書、1989年。B. Ward, *Miracles and the Medieval Mind-Theory, Record and Event 1000–1215*, 1982. および Jürgen Petersohn（Hrsg.), *Politik und Heiligenverehrung im Hochmittelalter*, Sigmaringen, 1994.

(4)　Dieter v. der Nahmer, *Die Lateinische Heiligenvita*, Darmstadt, 1994. なお、聖人伝〔ハギオグラフィー（Hagiography）については、1999年にブリュッセルの Société des Bollandistes が出版目録を出している。

(5)　H. Börsting, *Geschichte des Bistums Münster,* Bielfeld, 1951 および Franz-Josef Jakobi, *Geschichte der Stadt Münster,* Münster, 1994, Bd. 1.

(6)　Libellus Monasteriensis de miraculis S. Liudgeri, in: R. Wilmans（Hrsg.), *Westfälisches Urkundenbuch Additamenta,* 1877, S.104–110.

(7)　Eckhard Freise, Vom vorchristlichen Mimigernaford zum honestum monasterium Liudgers, in: Fr. -J. Jakobi, *ibid.,* S. 1–51, Wilhelm Kohl, Kirchen und Kirchliche Institutionen, in: Fr. -J. Jakobi, *ibid.,* S. 535–573.

(8)　リウドゲルスはフリース人貴族を両親（父は Thiadgrim、母は Liafburg）に持ち、フェヒト河畔のツィーレン（Zuylen an der Vechte）で生まれた。両親はキリスト教徒であった（H. Börsting, *ibid*., S.14.)。

(9)　アルクイヌスは782年にイギリスを離れ、カール大帝の許でアカデミアや宮廷付属学校を造り、学芸の普及に尽力したが、彼とリウドゲルスとの交流は以後40年間にわたって続くことになった（E. Freise, *ibid.,* S. 21.)。

(10)　リウドゲルスは772年にヨークを離れたが、この理由は、同郷人〔フリース人〕の大商人がヨークで現地人〔ヨーク伯爵の息子〕との係争で殴り殺してしまい、フリース人街区に死者の親族が復讐に来るという噂が流れ、これを恐れてヨーク市を脱出したのが、真実であり、リウドゲルスにとっては不本意であった（E. Freise, *ibid.,* S.21.)。

(11)　教会の十分の一税は782年以降、土着のザクセン農民に彼らの共同体の司牧（Pfarrer）に提供する義務として導入された。この貢納物の徴収に対する反発が募って792年にフリースランドで爆発し、794年までにザクセン全域に拡大した（E. Freise, *ibid.,* S. 27.)。

(12)　ミミゲルンアフォルド（Mimigernaford）とは、ミュンスター市の古ザクセン名である。アー川の浅瀬（Aafurt）を定住地として先取した小集団（氏族であれ従者であれ）の名前〈Mimigernen〉にちなんで命名されたものである（E. Freise, *ibid.,* S. 11–12.)。ここは777年以降、エヒターナッハ（Echternach）の影響地域になり、また遅くとも784年以降には、教会と１人の司祭が存在した。リウドゲルスの時代（795年以降）には、教会の周囲にはザクセン系手工業者たちの定住地ができていた（E. Freise, *ibid*., S. 27–29.)。

(13)　Wilhelm Stüwer, *Das Erzbistum Koln 3. Die Reichsabtei Werden an der Ruhr*, Berlin-N. Y., 1980. 山本健「中世都市形成期における北西ドイツ農村社会の変質と都市移住民――ヴェルデン修道院所領を中心に」『社会経済史学』、第62巻６号、1987年。

(14)　R. Wilmans (Hrsg.), *ibid*., S.104–105.

(15)　11世紀末から12世紀初期のミュンスター市は聖職叙任権闘争（1075–1122年）の影響を受けていた。フリードリヒ１世（1064–1084年在職）そしてエルポー（1085–1097年在職）両司教は皇帝ハインリヒ４世を支持し、次のブルクハルト司教（1098–1118年）も皇帝ハインリヒ５世（1106–1125年）の側近として仕えていた。しかし、皇帝に反対の立場をとるザクセン貴族たちは、新興の有力貴族ズップリンゲンベルク家のロタール（Lothar von Süpplingenburg）の指導の下、ケルン大司教フリードリヒ１世とも連携して、1114年の秋に皇帝の宮廷のあるドルトムントを攻撃し、さらにミュンスター司教区を荒らし回っていた。特に、1115年（２月11日）のヴェルフェスホルツの会戦（*Schlacht am Welfesholz*）で皇帝ハインリヒ５世が敗北した後は、ロタールとその一派はミュンスター市を攻撃した。その最中ブルクハルト司教が死去し、その後任者として、ロタールの支持を受けた、彼の甥のヴィンセンブルクのディートリヒ２世（*Dietrich II von Winzenburg*：1110年にミュンスターで助祭）が選出された。しかし、皇帝は彼を認めず、これに対してロタールはディートリヒ２世を司教に任命させるべく、1121年にミュンスター市に攻め込み、火を放った。この火はやがて都市全体 をなめ尽くした。特に聖堂の焼失は同時代人を狼狽させた。皇帝は後にディートリヒ２世の司教職を認めた（Manfred Balzer, Die Stadtwerdung-Entwicklung und Wandlungen vom 9. bis 12. Jahrhundert, in: Fr.-J. Jakobi, *ibid*., S.69–71.）。

〈邦訳〉　聖リウドゲルスの奇蹟録（12世紀後期）

（注記）①訳文中の〔　〕内の日本語は、各条項の理解を容易にするために訳者が補充したもの。
　　また（　）内は原語のラテン語である。
　　②各条項の前に、内容を要約した小見出しを設けて、読者の便に供した。
　　③人名はすべてラテン語形式で記述した。
　　④訳注をつけた箇所は、本文中に＊印で示した。

（１）〔ミュンスター市内での礼拝堂建立予定地の提供経過について〕

後世に残した数々の先例からも明白なように、広く知れわたっている聖リウドゲルス（S. Liudgerus）の功徳（meritum）について、またその彼の生前および死後に各地で、特にヴェルデン（Werthena）地方で、神が彼を介して行った、と記されている数々の奇蹟について、さらに修道院（Monasterium）がいつ、どのようにしてその司教座を余が知っている数々の奇蹟と関係づけたのかを、〔具体的な〕事実を挙げて略述する。無論、上記の事柄をより完全に確定せんがために、昔から我々の時代〔今日〕にまで伝えられている数々の真実の関係を手掛かりとして、調査〔吟味〕可能な数々の奇蹟に簡単に触れる〔予定でいる〕。

ミュンスター市を拡大し、そして同市内に多くの教区（parrochia）を作ろうと決心したミュンスター司教ブルクハルドゥス（Burchardus）［1098–

1118 年在職〕は、ある地所を取得し、そして聖リウドゲルス〔を顕彰する〕ために築かれる予定の教会に譲渡した。しかし、教皇権（sacerdotium）と国王権（regnum）との間に〔聖職叙任権闘争という〕不安定な状態[1075 1122 年]*が続いていたため、聖リウドゲルスへの尊敬〔の念〕は底辺部〔住民レベル〕では薄れていったばかりか、聖リウドゲルスがミュンスター市内（infra urbem）に所有していた礼拝堂（capella）も、司教テオドリークス（Theodericus）［1118－1126年在職］**の時代に、放火されて荒廃し、その後は不幸にも〔誰からも〕顧みられなくなっていた。

さらに、領主にして大教会〔司教座聖堂〕の参事会員（cannonicus）たるヘルムヴァルドゥス（Helmwardus）は、彼〔独自〕の判断で、司教ブルクハルドゥスから任されていた上記の地所を不法に占拠し、手離さなかった。そのため、その地所は、余の時代〔12世紀後半〕に至って、世襲（相続）権によって（hereditario jure）、ヒンリクス（Hinricus）という市民の所有物になった。

しかし、余が信じた通り聖霊に導かれた市民たち（concives）は〔上記の所有権移転の〕経過を――〈その経過はどのような種類のものであれ, 詳しく記載されていなかったため、余もざっとしか目を通さなかったのだが〉――司教ルートヴィクス（Luthewicus）［1169－1173年在職］にかいつまんで報告し、そして聖リウドゲルス〔を顕彰する〕ために上記の地所ないし他の所に教会（ecclesiam）が建設されることに市民たちが賛同している旨、言上した。しかも〔土地所有者たる上記の市民〕ヒンリクス自身は、幼少の頃からきわめて〔性格が〕素直であったので、信心の証として、あの〔問題の〕地所を手離した。すなわち、彼は市民たちの提案に応じて、あの地所をより良い土地ないしは然るべき土地と交換し、復活祭が始まって４日目に〔問題の地所を〕引き渡した。

神の慈悲を称賛しない者などが〔この世に〕いようか。神がこんなに多くの恩寵〔奇蹟〕という贈り物を施していた時代に、このような当然のお礼と好意を父なるキリストに快く提供しない者などが〔この世に〕いようか。

＊　E. ヴェルナー（瀬原義生訳）『中世の国家と教会――カノッサからウォルムスへ1077–1122』、未来社、1991年を参照。
＊＊　司教テオドリークスはドイツ名ではディートリッヒ２世（Dietrich II von Winzenburg）と表記（Fr. -J. Jakobi（hrsg.）, *ibid*., S. 69–71）。

（２）〔火災を免れたミュンスター市内の穀物倉庫と十字架との関連について〕

木造の美しい礼拝堂が建立されて、ほぼ１ヵ月が経過した。その過程で、〔礼拝堂の地下〕墓地と祭壇が神に奉納される〔前日の〕夕方に、司教の命令で、十字架と聖リウドゲルスの聖遺物が墓地および祭壇の中に運び込まれ、最も聖なる聴罪師（confessor）〔たる聖リウドゲルス〕の功徳も知れ渡った。以上のことが噂として広まり、〔この噂を耳にした〕ヘレムブルク（Helemburg）という女性市民は香とロウソク（tus cum candelis）をきわめて慎ましやかに奉納した。彼女は頭痛が原因で５週間ほどで極度にやせ衰えていたからである。彼女がやっとのことで祈りを済ませると、〔不思議なことに〕頭痛が治まっていることに気づき、喜んで帰宅した。ミサは有益な限り喜びであり、そしてミュンスター市の多くの者たちには、将来の予測に関する明るい希望〔を与えてくれる手段〕でもあった。それというのも、特に市民たちは十字架について多くのことを耳にしていたからであった。〔たとえば〕あの十字架は納屋あるいは穀物倉庫の中に長い間ぞんざいに放置されていたが、〔1121年２月２日の〕火災*で〔ミュンスター市内のほとんど〕すべての建物が焼失した中、十字架が置かれていた〔上記の〕穀物倉庫だけは、被災地の中心部にあったにもかかわらず、不思議と無傷のままで残った。この事実を神が施した力〔奇蹟（divina potentia）〕と考えた教会関係者（domesticus）は、その家屋の敷地内に十字架のための美しい小部屋を作り、そして可能な限りの尊敬の念を表わした。さらに、その周辺に住んでいる人びとと、十字架や聖リウドゲルスの呼びかけに応じて、その災禍の中で〔神の〕救済を感じとった人びとが、可能な限りの奉納物を差し出した。〔そのため〕この当時は、とにかく、香と夜の燈明〔ロウソク〕が常に絶えることがない状態であった。

＊「史料の紹介」の注（15）を参照のこと。

（3）〔東フリースランド居住者の息子の癲癇症の治癒について〕

次に、〔東〕フリースランド（Frisiae）のモルサーテン（Morsaten）〔現在の Mormannerland〕と呼ばれる地域に、ある者が住んでいた。彼の一人息子は、1日に4回ないしそれ以上の回数の発作に見舞われる癲癇性の症状で苦しんでいた。この件について、彼は神の御意志〔が如何なるものか理解できずに〕悩んでいた時、夢の中で、次のようなお告げを聞いた。すなわち、エムス河（Emesa）近くに十字架があり、その十字架の前で息子〔の病状〕に関してお願いしなければならない、と。〔以上のような内容の〕夢を彼は見た。そこで、彼は早朝、息子とその他11人の仲間と一緒に異国へ旅立った。そして、ライン河（Rene）に到達した彼らはついに十字架のある場所を知った。十字架が置かれていた家に入るや否や、病弱で瀕死の状態にいた彼の息子が〔急に〕地面の上で跳躍しだしたのであった〔元気になった〕。おー、最も聖なる聴罪師〔聖リウドゲルス〕の敬虔な功徳よ！十字架の前には、金貨、銀貨そして様々な食料品などが所狭しと供えられている。それらは多くの人びとに配られ、また余が主張した如くに十字架が〔ミュンスターの〕修道院に運び込まれたので、十字架に奉仕する多くの者〔修道士など〕が急ぎ集められた。

しかし、はからずもヨハネス・クリュソストムス（Johannis Krysostomus）*のあの〔言葉〕――〈汝ら、すべての霊に信頼を寄せることなかれ。しかし、もしそれが〔本当に〕神からの霊であるならば、その霊の検証〔証明〕に付すべし〉――に注意を向けている者たちは、あの十字架の中に何が〔どの様な仕掛けが〕あるのか吟味するように司教に忠告した。〔そこで〕上記の息子の寿命が尽きる〔息子が死亡する〕と、神は彼の生涯を調査すべき対象に付け加え、そして数々の奇蹟を確実なものにするためにすべての曖昧さ〔誤謬〕を取り除いた。

＊ヨハネス・クリュソストムス［347-407年］は398年にコンスタンティノープルの総主教に選出され、富の悪用と他の不正に対して改革を行った。しかし、富裕者や権力者から反感をかい、403年にはアレクサンドリアの総主教テオフィロスの陰謀により追放される。彼の説教はわかりやすく、徹底して実践的なものであった（D. アットウォーター/C. R. ジョン（山岡健訳）『聖人事典』、三交社、1998年、439-441ページを、また『キリスト教人名辞典』、日本基督教団出版局、1986年、492ページを参照）。

（4）〔少年の麻痺した片脚の治癒について〕

修道院に片脚が麻痺し、2本の杖で体を支える少年（Puer）がいた。この少年は3日3晩、〔同じ〕夢を見た。それは、夢の中で、ある老人が少年に近づき、彼の悪い〔麻痺した〕片脚を切り取り、少年がその老人に何の目的で〔自分に近づいて〕来たのかを尋ねる間もなく立ち去った、という夢であった。そこで、夢で示されたような〔不快な事件〕に不安を抱いた少年は恐怖の余り疲労困憊し、とうとう呆然自失（自我喪失）の状態に陥った。やがて、意識を取り戻した少年は大声で人を呼び始めた。そして少年は特に自分の周辺にいる者たちに徹夜で寝ずの番をして〔自分を保護してくれるように〕依頼した。しかし、彼らのうちのある者が3日目の夜に、〔不快な〕夢を見た少年のために寝ずの番をする自分に嫌気がさし、その少年を厳しく問いただした。その上〔少年が見たその夢の〕光景を聞いた彼は、その少年に、真昼（summo mane）に聖リウドゲルスの礼拝堂（cappela）に行って、聖人の御名を唱えるように説得した。

長い間〔十字架を蔑ろにして〕十字架の前で祈念してこなかった少年は、言われたことを実行したが、やがて疲労困憊して横になった。そして、ある痛みが彼の全身に広がるに及んで、彼は失神した。やがて我に戻った彼は大声で人を呼び寄せ、そして彼の周りに集まった者たちに、「どんな方法を用いて自分の悪い脚を除去したのか〔治療したのか〕」を尋ね始めた。しかしこの者たちは、少年の身体には触れなかったと答え、さらに忍耐強く神および聖リウドゲルスの御名を唱えるように少年を励ました。少年は、言われたことを実行することで、分別が甦り、そして十字架を自分に与えるように願いでるとともに、〔聖リウドゲルスの聖遺物が入れられた〕墓の廻りを一回りした。多くの人びとも治癒を可能にした神を讃えながら、少年の後に従って〔その墓を回った〕。

（5）――〔無記載〕

（6）〔井戸に落ちた幼児の蘇生について〕

同地〔修道院〕に留まっている貧しい女（paupercula）が、ある祝祭日にビールを修道院に運搬するために、トランザムネン（Transamnen）に赴い

た。その際、彼女は１歳になる男児を家に残してきた。しかし、彼女が〔いつもより〕長い間留守にしていたのと、〔彼女の他の〕すべての子供たちも家を離れていたので、その１歳の幼児はゆりかごから這いだし、長い間あちこちと這い回ったあげく、終いには井戸の中に落ちてしまった。帰宅して、幼児がいないのに気づいた母親は、近所の家々を駆けずり回って、誰か自分の幼児の行方を知らないか、あるいは幼児の姿を見なかったかどうかを尋ね回った。ところが近所の人びとは幼児の行方を知らないどころか、その姿をさえ見なかったと、異口同音に答えたので、何が起こったのか知らない母親は急いで家に戻った。

やがて、〔幼児は発見され〕女性たちは井戸から引き上げられた子供を机の上で自分たちの手と手の間にのせて転がして〔蘇生術を施して〕いた。しかし、子供〔の顔〕には、何らの生命力をも見て取れなかった。それ故に、精神的に不安になった母親と多くの人たちは一緒に涙を流しながら「聖アエギディウス（Egidus）よ、聖ニコラ（Nicola）よ、そして聖リウドゲルス（Ludgerus）よ、あなた方のご加護をあの幼児に与えたまえ！」と叫んだ。彼女らはそう言い終えた時、――〈それ以前にはほとんど起こりそうにもなかったにちがいない事なのだが〉――幼児はその口から井戸水とミルクを吐き出し始めた。そして、その事〔幼児の蘇生〕は神の力〔奇蹟〕であったことが理解されればされる程、ますます彼女はあたかも以前に数々の苦難などがなかったかの如くに、力強く働きだした。

（７）〔視力の回復について〕

テルクト（Telgth）という貧しい女（paupercula）がいた。彼女は両眼を病み、物が見えず、太陽の光に耐えられない程、その症状は進行していた。そのため、祭式用の短い白衣の袖（manica supperpelliceum）を常に自分の顔近くに〔置き、眼を〕覆っていなければならない程であった。修道院の神〔キリスト〕が聖リウドゲルスの功徳を介して行った数々の奇蹟を耳にした彼女は、もし自分に視力が戻ったり、あるいは自分が苦しめられている目の痛みが消えるならば、奉納物を神〔修道院〕に捧げる旨、誓約した。さらに彼女は、あたかも聖なる聴罪師が祈りに駆り立てられるように、昼

夜を問わず聖リウドゲルスに祈り続けた。そして、とうとう〔ミュンスターの修道院での〕祈願の日が近づいた。そこで、村人たち（homines villae）はそれぞれのお供え物を持ってミュンスターの修道院のミサに参列するために村を出ていった。お供え物〔を持った人々の行列〕について行こうと〔不自由な目をおして〕村外れまで行った時に，一部の教区民〔村人(parochiani)〕が戻ってきたので、〔ミュンスターでの祈願が終わったものと勘違いして〕彼女自身も帰宅の途についた。その途中、彼女はその〔勝手な〕帰宅のために（causa reditus)、彼女の両眼に罰が当たるのではと心配していたところ、どうしたことか、〔目を覆っていた〕袖を顔から外しても、いつもの苦痛を感じなかった。さらに驚いたことに、彼女は両眼を開けると、何の苦痛をも感じず、物が見えた。彼女は何をすべきか〔考え〕、結局、先に〔ミュンスターの〕修道院に行った村人を〔再び〕追いかけて修道院に行き、〔彼らに〕自分の視力回復についての証人になってもらった。

（８）〔オスナブリュック出身の少年の視力の回復について〕

家々を回って食料（パン）の施しを受けるオスナブリュック（Osnabrugge）出身の少年（puer）がいた。彼が片目の視力を失って２年が経過したが、〔残された〕もう一方の目も街道をかろうじて識別することが出来る程度の〔弱い〕視力であった。彼が聖ゲルトルーディス（Gertrudis）山〔にあるベネディクト系尼僧院ゲルトルーデンベルク（Gertrudenberg)〕で施しを得た時、〔その尼僧院の〕貴族出身の修道女たちとその奉仕者たちから（a dominabus et earum ministris)、「汝は、何故に、聖リウドゲルスの御名を唱えないのか。修道院を介しての御聖人様の恩寵は霊験あらたかであり、〔御名を唱えれば〕汝は物が見える〔視力が回復する〕ようになるかもしれないのに」という話を聞かされた。

さらに同地の聖職者（presbiter）も、聖リウドゲルス〔＝修道院〕に奉納するロウソクを〔回復した〕目の数だけ彼に与えることを約束した。修道女らに勇気づけられた少年は、忠告されたように、卑しいそして疲れ果てた心を〔聖リウドゲルスに〕捧げた。するとほどなく、〔これまで〕おぼろ

げにしか見えなかった片目でも、これまでよりもはっきりと物が見えるようになった。そこで、彼は聖職者〔司祭（sacerdos）〕との約束を思い出し、司祭に〔例の〕約束のローソク〔片目なので１本〕を要求した。そして彼は生涯を修道院に捧げる決心をした。彼は本当ならばそれ以前に修道院に行くべきであったのだ。また〔その後〕彼はもう一方の〔視力を失っていた〕目も十分に見えるようになった〔視力が全面的に回復した〕。さらに、数々の恩寵が〔彼に〕施されたのであろうか、以前の衰えていた彼の体力も、自分の労働で確固たる食料と賃金を獲得するまでに回復した。

（９）〔右腰の治癒について〕

ライン河北部のエムスブューレン（Emsburen）に３年間、右脇腹をも、また左脇腹をも下にして横臥することができない者がいた。〔その原因は〕矢が左肩から、さらに下の臍の部分そして右腰にまで貫通したためであった。〔そのため〕彼は絶えず痛みに耐え、そして常に仰向けの状態で臥さねばならなかった。その上、何の因果か、不幸にして体力が落ちた〔衰弱した〕時、彼は夢の中で、聖リウドゲルスの功徳によって癒される予定である、というお告げを聞いた。このお告げを信用した彼は、自分の人生を聖リウドゲルスに、すなわち修道院に捧げた。慣習上、彼には修道院に奉仕する義務はなかったが、しかし、彼は直ちに修道院で貴顕（dux）の馬車係として奉仕した。

さて、彼が街道で馬車を走らせていた時、彼は右腰にかゆみを少し感じた。彼はその箇所を掻こうとして、民衆語〔ドイツ語〕でPyl（＝Pfeil）と呼ばれる鉄製の鏃でさすってみた。すると〔どうだろうか〕、左肩から血の混じった大量の膿が抜き取られたよう〔な感じが〕した。まさに、彼が苦痛を感じていたあの部分から〔膿が〕流れ落ちたかのように、彼には思われた。そのために、〔煩っていた〕苦痛が消え失せ、そして彼は直ちに自ら歩くことも乗馬することも可能なほど、元気になった。そこで彼は修道院に行って、〔奇蹟を〕可能にした鏃を奉納し、神そして聖リウドゲルスに対して、感謝を捧げた。

（10）〔視力の回復について〕

アルデンセーレ（Aldensele）地区〔今日のGronauの北西、Twente近くのOldenzaal〕に、ある女がいた。彼女は両眼に厚い膜ができ、そのため5年間、街道を、それに昼間以外には物を完全に識別することができなかった。彼女はかなりの忍耐力で自分の不幸に耐えていたのかもしれない。ある夜、彼女は夢の中で、聖リウドゲルスの功徳によって、視力を取り戻せるかもしれない、というお告げを聞いた。しかし、彼女は夢で聞いた事が吉兆であるということを――〈このことは、至る所で〔しかも〕多くの人の記憶によって認められていたのだが〉――知らなかった。彼女には神の慈悲深さを疑う気持ちはまったくなかったが、しかし、夢〔のお告げ〕の中に多少なりとも重要な〔意味が隠されている〕ということに彼女は気がついていなかった。〔そのためか〕その後再び彼女は、奉納物を修道院に差し出す義務がある、という夢を見た。〔再度〕それを実行せずにいた時に、アルデンセーレ・フレッケンホルスト出身者で異国に行っていた者たちが帰って来て、〔異国で〕見聞したことを報告する、という機会が設けられた。〔これに参加した〕彼女は彼らから、夕方の〔祈りの〕いつ、奉納物を修道院に差し出す誓約をすべきか〔などの〕教えを受けた。するとその翌日に〔不思議なことに〕彼女は視力を回復した。すなわち、朝から彼女の両眼の膜が裂け、やがてあたかも水のように、涙となってすべて流れ落ちたのであった。そこで彼女は神の恩寵を十分に理解できたので修道院を訪れ、〔そして奇蹟の〕証言者になった。

(11)〔ゾースト出身の遠隔地商人の息子の尿管症の治癒について〕

ゾースト（Sosat）出身の〔遠隔地〕商人（mercator）がいた。この商人には一人の息子がおり、この息子の尿はすべて、臍帯部分のある裂け目から流れ出ていた。つまり、正常な尿管（尿道）を通って放尿されていたのではなく、流れの悪い、しかもまったく不明な管を通って放尿されていたのである。もちろん、放尿せねばならない時にはいつでも、子供は〔まず〕苦痛のためか大声で激しくうめき始める。この声〔による刺激〕が下腹部に達すると〔それが合図かのように〕下腹部は至る所で収縮を始め、それに促されて、最終的に放尿されるのであった。この痛みは5年にわたり、

その痛みが激しくなったある夜に、その子供の母親が夢の中で、聖リウドゲルスが彼女の息子を治してくれる、というお告げを聞いた。神が聖リウドゲルスを介して行っていた修道院の恩寵を耳にしていた母親は、近所の人びとを、またその他の親しい者〔親族〕たちを訪ね、彼らに自分が夢で聞いたお告げの内容を話し、さらに彼らに一緒に神の御名を唱え、同時に子供が治癒するように、聖リウドゲルス〔修道院〕にそれぞれ〔各人〕の奉納物と、子供の〔分の〕奉納物を差し出すようにお願いした。〔そこで〕彼らは奉納した。その結果、子供は以前よりも良い状態に回復し始めた。やがて尿はしかるべき尿道を通って放尿されだしたので、自分の息子の病気回復のために母親が行った治癒誓約の証人でもあった父親は、子供を修道院に連れていった。

(12)〔ミュンスターの司教館で捕まった貧民の不思議な体験談について〕

〔ミュンスターの〕修道院の司教館の宿泊所〔に不法に居るところを〕見つけられたある貧民（pauper）は、あたかも窃盗犯の如くに、教会関係者（servi）たちから握りこぶしで殴られ、髪を引っ張られて河の中に引き入れられようとしていた。彼がまさに河の中に突き落とされようとした時、そこに来あわせた教会の家人〔ミニステリアーレス（ministerialis)〕がそれを阻止した。――〈もちろん、教会関係者たちはこの貧民に対して懲罰以上の行為は行ってはいなかったのだが〉――教会関係者たちの拘束から救出されたこの貧民は施療院に行き、救護係に自分に施しをしてくれるよう懇願した。この貧民は、さらに〔同情を引こうとして〕自分が〔過去に〕どのような待遇を受けてきたのか語り、宣誓した上で、自分はその時〔決して〕悪事を犯さなかったし、また〔今回もけっして〕悪事を犯そうとして〔司教館に〕来た〔忍び込んだ〕のではない旨、付け加えた。同情した上記の家人は、急ぎ集まって来た者たちに対して、貧民を〔施療院に〕入所させる旨、宣言し、この貧民にできる限りの看護を施した。しかし、飲酒で活力を取り戻した貧民は悪態をつき始め、終いには主〔イエス・キリスト〕の聖体を受け取るべく司祭を呼び寄せろ、などと要求する始末であった。司祭は呼ばれたが、貧民は〔酩酊していたためか〕何も話せず、また

何人をも正しく認識できなかった。その上、この貧民は自分の胸も頭も仰向けにして高いベッドに寝たところ、まるで自分の両足が胴体と共に〔高く〕持ち上げられた〔逆さ吊りの状態になった〕かのように、血が胸から口を通って流れ出した。〔その場に〕居合わせた我々が怪しんだので、彼はそれがどのようなものであったのかを話す気になり、終いには我々にはほとんど理解不可能な「聖墓地〔イェルサレムにあるキリストの墓(Sanctum sepulchrum)〕」や「聖ヨハネ(sancte Johannes)」ついて語り始めた。

〔そうこうして、施療院にお世話になっていた〕彼は秋の頃に、日曜から金曜まで連日働き続けたためか、〔このままでは〕今に死んでしまうかも知れないと思われていた矢先、彼〔の体〕に生命の動きが認められなくなった〔心肺停止の状態になった〕。〔ところがである〕、突然「主よ来たりたまえ(Domine bene veni atis)」と彼は〔はっきりした口調で〕言い、そう言い終えると、彼は再びもとのように横になった。いやそればかりか〔その後〕すぐ「主よ〔お蔭さまで〕気持ち良く〔なりました〕(Domine libenter)」とも言った。そして、元気を取り戻した彼は、自分のトゥニカ〔下着(tunica)〕*がどこにあるのかを尋ね、さらに「ベルンハルドゥス(Bernhardus)よ、〔私を〕救護していたあなたは、〔本当に〕何も見なかったのですか。少なくとも、聖リウドゲルス様が右手に十字架を、左手に杖を持って、この場においでになったのを。御聖人様は立派な、尊い主であられました。〔そして〕確かに御聖人様はあの礼拝堂にお戻りになりました」と付け加えた。しかし、ベルンハルドゥスは確かにかなりの香を感じたものの、彼が死ぬのではないかと考え〔心配し〕ていたので疲れ果ててしまい、「汝は〔ベッドで〕寝ておれ。私はイーバーヴァッサー(Uberwasser)尼僧院**の修道士(frater)にして司祭(presbiter)である〔主人の〕ゲルベルトゥス(Gerbertus)様をお呼びしようと思っている」と答えた。このことを聞いた彼は、「それでは楽にさせてもらうよ」と返事をして、ベッドで休んだ。しかし司祭ゲルベルトが到着したので、彼はベッド〔から身を起こし、そして〕座り直した。そして彼は、聖リウドゲルスが「自分(の生き方)に従え」と命じたと主張して、自分にトゥニカを与えるよ

うにこの司祭に求めた。トゥニカは与えられたものの、両手がふるえるためか、彼はほとんどトゥニカを身につけることができなかった。そのため、ある者が彼に「〔まずは〕お座りなさい。汝の脚は至る所傷だらけなのだから」と語った。なぜなら、彼は司教館の落とし戸（trappa）から髪をつかまれて連れ出された時に、彼の脚が折れたからであった。

しかし、彼はそのこと〔彼が受けた取り扱い〕に腹を立てていないと語り、傷ついていない片足を上げて、〔もう一方の悪い〕あの足で立っていた――恩寵が施されたあの足で。さらに彼は体を伸ばしながら〔身体が自由になるほど完治したので〕施療院の礼拝堂に入り、修道士や彼に従うその他の多くの者たちに3回ほど感謝を表した。そして、あたかも何らの不幸もなかったかのように、彼は直ちに聖なる聴罪師の礼拝堂に急いだ。その礼拝堂で彼は祈りを終えた後、身を捧げ、そして次週の水曜日に異国の聖ヤコブ（Jacob）教会〔サンチャゴ・デ・コンポステーラ〕***へ〔の巡礼に〕旅立っていった。

＊　トゥニカとは、頭からすっぽりかぶる袖なしの服で、礼拝用にも、日常用にも用いられた（H. Fr. ローゼンフェルト（鎌野多美子訳）『中世後期のドイツ文化』、三修社、1999年、163ページを参照）。

＊＊　イーバーヴァッサー尼僧院〔女子修道院〕は1032年から約8年の年月をかけて、ミュンスター司教ヘルマン1世（Hermann I）によって建設された。この名前はアー（Aa）川を越えた地所（Überwasser）に由来する。また聖マリエン女子修道院とも呼ばれる。なお、現存する建物は14世紀後半のものである。Fr. -J. Jakobi, *ibid*., S. 546–549）

＊＊＊　サンチャゴ・デ・コンポステーラの聖ヤコブ教会への巡礼については、P. バレ/J. ギュルガン（五十嵐ミ ドリ訳）『巡礼の道 星の道』、平凡社、1986年やA. デュプロン（田辺保訳）『サンティヤゴ巡礼の世界 』、原書房、1992年、などを参照せよ。

(13)〔オスナブリュック近郊出身者の盲人の視力の回復について〕

オスナブリュック（Osenbrugghe）近くのベルム（Belm）〔という地域〕に盲目になって3年になろうとする男がいた。〔その盲人と親しい〕ある者が3日3晩、夢の中で見たままをこの盲人に語って聞かせた。〔それによると〕聖リウドゲルスが「汝の生涯を修道院に捧げなさい。そうすれば汝の視力は回復するであろう」と忠告した、と言うのだ。そこで〔これを聞いた〕盲人が奉納誓願を行ったら、〔不思議なことに〕聖マルガレータ（Margareta）の夜（7月22日）に視力を回復した。そこで彼は修道院を訪れ、

オスナブリュックの聖堂参事会員（canonicus）たちを、彼が 3 年間、盲目状態であったことの証人とした。

(14)〔司教座聖堂首席司祭の歩行能力の回復について〕

司教座聖堂首席司祭の職（prepositura）に就いていたリンケルロード（Rinkerrode）出身者が、長期にわたる疾患〔麻痺〕で左脚の筋短縮症を煩っていた。〔そのために〕彼は歩くことができないばかりか、腋の下に抱えた杖〔松葉杖〕で身体を支えるのに〔精一杯であった〕。〔ある時〕彼は、修道院が聖リウドゲルスの功徳を介して起こしていた数々の奇跡を耳にし、もし修道院に行って〔祈願したら〕、彼の健康が幾分か回復するかも知れないと思い、〔妻子に〕頼んで家畜の背に自分を乗せてもらい、そして修道院へと急いだ。彼は〔修道院の〕十字架の前で 2 日間留まってお祈りをしたが、〔持参した〕食料が底をついたので帰宅した。しかし、その〔お祈りの〕結果がいかなるものであったかは、〔帰宅時の事実が〕最も明白に示していた。すなわち、彼の妻子が彼を家畜〔の背〕から降ろそうと急ぎ集まった時、彼は自分で家畜の背から降りるほど健康になっていた。それは、彼が帰路の途中で健康を回復した結果なのだが、彼はいつ、そしてどこで健康を回復したのかは気づかなかった。そこで健康になった彼は修道院に戻り、以前ならば杖を利用して〔辛うじて〕可能であった歩行について感謝〔の意〕を表した。

(15)〔ミンデン教会の裕福な家人の健康回復について〕

ミンデン（Minden）教会の非常に裕福な家人〔ミニステリアール〕で、ヴェーゼル河（Wesera）のミュンスター側に居住していた者が麻痺のために不随になった。そのため〔この約〕1 年近くは、2 人がかりで左右から抱えてもらわなければ、歩くことさえ出来ない程〔の状態〕であった。〔悪いことには〕、このような状態からさらに衰弱が激しくなり始め、身体の多くの箇所（あちらこちら）が悪化していた。〔そんな〕ある日、彼の友達〔親族〕たちが修道院の聖リウドゲルスが行ったと聞いていた数々の奇蹟をこの家人に話して聞かせた。この数々の奇跡を聞いた彼は、――〈かなり以前から、死期が迫って来ていると思われていたのだが、それにもか

かわらず〉――「私が自分の健康状態について聖リウドゲルスにお願いをし、そして供物を聖リウドゲルスに奉納するという行為は、あなた方には良いものと思われますか」と尋ねた。これに対して、すべての者は異口同音に「その通り〔良い行い〕だ」と答えた。一体、誰が彼の健康〔回復〕に関して絶望していたであろうか。

祈願して3日目に、〔果して〕彼は自分が望んだ自分の家ないし荘園で(in curte sua)〔誰の手助けも借りずに〕ひとりで歩きだした。さらに5日目には、この家人〔＝騎士（eques)〕は徒歩で修道院に行こうと決心し、そしてほぼ1マイル〔約1.6km〕の地点に到達した時、裸足で毛織物の苦業衣*をまとった者〔神（laneus et nudipes)〕が遙かかなたから現れた。〔その後〕彼は〔修道院の〕十字架に、そして教会関係者に彼の供物を30回にわたって奉納した。すなわち、それぞれの奉納〔儀式〕毎に、ミュンスター貨幣で1ヌンムス（nummus）と軽い貨幣で1ヌンムスを奉納していた。ただし30回目には、〔例外的に〕軽い貨幣と重い貨幣をそれぞれ3ヌンムスずつ奉納した。それ故に、彼は毎年、彼の奉納物を修道院に搬送することを誓約し、かつ聖リウドゲルスの名誉において、自分は〔贖罪の意識を表明すべく〕裸足で毛織物の苦業衣をまとった姿*で自宅に戻りたいと語った。

＊「裸足で毛織物の苦業衣を着けた」姿とは、12世紀に特徴的な、苦業・贖罪の時のひとつの典型的な身なりである。つまり12世紀には良質の毛織物は普及していなかったので、毛織物と言えば粗悪な衣をさし、最も価値の低い衣服として苦業・贖罪の衣服を代表するものになった（徳井淑子『服飾の中世』勁草書房、1995年、116-120ページを参照)。

(16)〔悪しき考えからの解放について〕

自殺する以外に〔これといった〕良いこと〔方法〕がないと思い込むほど苦悩していた女がいた。彼女は〔その苦悩に耐えきれず、とうとう〕ある朝、綱（laqueus）と小刀（cultellus）――〈もし容易に首を吊ることができない場合には、さらに喉に小刀を突き刺して確実に死のうと思って小刀〉――を取り出した。しかし、彼女が自殺しようと考えた場所に急いでいると、〔聖職者ふうの〕白い長衣を〔身に〕まとった者が近づいて来て、彼女に「汝は良からぬことを企てておるな。理性を取り戻しなさい。そし

て神の御名を大声で唱え、そして聖リウドゲルスを信頼しなさい。そうすれば、汝は今の苦悩から、さらにその他の様々な困難からも解放されるであろう」と語りかけた。そして、このように語り終えると、この白衣の人物は姿を消してしまった。〔この人物が消えた〕まさにその場所で、彼女は免罪を乞い求め、やがて正気を取り戻し、かつ聖リウドゲルスの召命に応じたので、彼女はすべての悪しき考えから解放された。そして、直ちに修道院に駆けつけ、そして〔苦悩のために〕やせ衰えた彼女は綱と小刀を、その他の供物と一緒に奉納した。

(17)〔姿を消した子供の発見について〕

リンゲ（Linge）近くに居住するある者が、2歳になったばかりの男児がいないのに気がついた。彼は子供を近所の人びとの家や井戸、それに村の様々な小路でも発見できなかったので、〔次に〕畑や近くの木立をも捜してみた。〔このようにして〕彼は2日間捜し回り、疲れを感じた時に、彼は修道院の聖リウドゲルスが行ったと耳にしていた恩寵〔奇蹟〕を思い出した。彼はふと思い出したのだが、〔しだいに〕心の苦しみが深まってくるにつれて、彼は〔とうとう〕自分の名誉にかけて、もし自分の子供が発見されたならば、子供と同じ形をした銀塊を修道院に奉納する旨、誓約した。そして、彼は誓約を行ったのであたかもすべての心配事を聖なる聴罪師に引き取ってもらったかの如く〔安心しきって〕帰宅した。その帰宅の途中、彼が一般的に〔民衆語で〕fene〔＝ven〕と呼ばれていた沼沢地にやって来て、この沼沢地を横切ろうとしていた〔まさに〕その時、彼は思いがけなく我が子を発見したのであった。しかも、子供が発見された所はどんなに驚いても驚き足りないような場所であった。それというのは、〔この沼沢地には〕至る所にたくさんの穴があいており、子供がそれらの穴に落ちずにいたことは人間の思考〔予測〕をはるかに越えることであったからである。このようにして、子供の発見が神の恩寵であったと判断した彼は、〔以前に〕誓約したように、子供と同じ形の銀塊を修道院に奉納した。

(18)〔従者の悪霊憑きから解放について〕

夜ひそかに、ある寡婦の作物を荒していた騎士の従者（armiger）は、〔夜になると、どうしたことか〕気が触れていた（sensum perdidit）。〔それ故、周りの人々は〕彼は何らかの精神錯乱状態に陥って苦しんでいたのではなく、むしろ悪霊（malignus spiritus）にとりつかれていた、と考えた。なぜなら、彼はあらん限りの悪行を働き、夜中には狂気の成せるわざか、オスナブリュック市内の街路を走り回っていたからである。それから数年が経過したある日、彼は夢の中で聖リウドゲルスが「汝、目を覚ましなさい。そして修道院のために奉仕しなさい。そうすれば恩寵を得るであろう」と囁くのを聞いた。しかし、理性を働かせることができない〔分別を持ち合わせていない〕者がどうして修道院のために働くことができようか。神と同じくらいに自分が信奉している聖人たちを盛んに誉め讃えることを知っている者に〔のみ〕、恩寵〔奇蹟〕が起こる〔有益である〕ということを、彼は〔本来ならば〕聞き知っているべきであった。〔彼の行為に関する〕あらぬ噂をやたらに繰り返して喋ったり、とりわけ、いわば白昼の悪魔に唆されて、このように〔新しい〕巷説〔噂〕を取り入れたりするのは、馬鹿者どもの〔やり口であり〕、あるいはどんなに考えてみても非常識な連中の習わしである。

そこである日、彼は〔改心して〕〔主人である〕騎士に〔自分の行為を〕告白することにした。それというのは、上で述べたように、聖リウドゲルスが彼に語りかけていたからであった。〔相談を受けた〕騎士（miles）は深く考えをめぐらし、確かに彼は気が触れている時に悪行を働いてはいたが、しかし〔彼が聞いた夢のお告げの言い分も〕本当にその通りだと思ったので、騎士は彼を修道院に連れていった。彼が修道院に留まっていた時に、理性を取り戻した。そのため、彼は異国の聖アエギディウス（Egidium）教会*〔南フランスのアルル近くのサン・ギレス〕への巡礼に旅立とうと決心した。

＊　聖アエギディウス教会とは南フランスのアルル近くのサン・ギレス教会のラテン語名である。ギレスは 9 世紀以前にこの近隣で隠世修道士であった可能性があるが、彼についてはほとんど何も知られていない。聖堂への巡礼を啓発するために書かれた彼の伝記は、10 世紀に著されたものである（D. アットウォーター / C. R. ジョン（山岡健訳）『聖人事典』、

三交社、1998年、151-152ページ参照)。

神はその僕たる聖リウドゲルスを介して、その他にも多くの奇蹟を行った。しかし、多くの奇蹟のうち、これらの僅かの奇蹟話は、神にして我が救世主たるイエス・キリストを称賛ないし頌徳するために記されたものである。――イエス・キリストはその神聖さの点で称賛ないし頌徳すべき存在であり、そして現世においてすべての点で祝福される神である。――アーメン。

〔付記〕

同邦訳にあたり、恩師の橡川一朗先生（東京都立大学名誉教授）からご教授をいただいた。この場をを借りて、お礼申し上げる。